

都市計画全国大会WS報告（案）

テーマ：「持続可能な地域づくり」の学習をどう支援するか

－高校での地理総合の必修化と都市計画専門家の役割－

日時：2019年11月10日（日） 15:30～17:30

会場：横浜市開港記念館1階講堂

主催：日本都市計画学会 総務・企画委員会

基調講演：濱野清（文部科学省）

話題提供：大島英幹（慶應義塾大学）、泉貴久（専修大学松戸高等学校）、北原啓司（弘前大学）、菊池雅彦（国土交通省）

司会、コーディネータ：篠沢健太（工学院大学）

●開催趣旨

2022年度から新学習指導要領により高校で「地理総合」が必修となり、その教育内容として、「持続可能な地域づくりと私たち（自然環境と防災、生活圏の調査と地域の展望）」が取り上げられ、生活圏の調査の主題例として、買い物弱者の問題、住宅団地の空洞化等が解説で示されている。このWSでは、地理総合のねらいと内容、都市計画に与える影響、高校における実践状況、大学における協力の可能性を報告いただき、高校における「持続可能な地域づくり」の学習への支援のあり方、都市計画の専門家の果たす役割、都市計画学会として取り組む方向性、について意見交換を行った。

●基調講演「地理総合とは何か？～『持続可能な地域づくりと私たち』の関わりを、全ての高校生が考える科目～」(濱野清)

高等学校教育の改善の方向性を示した上で、社会科系新科目が現代の諸課題の解決を視野に入れ、各科目の特性を踏まえて社会的事象を考察するように構成されていることを示した。地理の必修修について、地理的な思考力や地理的技能の育成、問いを通して育む地理的な見方・考え方等の考えを示し、その上で、高校社会科系新科目の概要、地理総合の概要、要点、生活圏の調査と地域の展望の概要、地理探究の概要について報告を行った。

●話題提供1「地理総合必修化が都市計画に与える影響」(大島英幹)

地理総合の「生活圏の調査と地域の展望」の学習がまちづくりや都市計画に与える影響やまちづくり専門家の支援の必要性を指摘した上で、専門家による地理総合の支援の例として、国土交通省の教員向けGIS研究プログラム開発や土木学会の出前授業・シンポジウム・教材作成等の事例を紹介し、都市計画学会の取り組みへの期待を述べた。

●話題提供2「高校『地理総合』における生活圏学習の取り組みと課題」(泉貴久)

高校における実際の生活圏学習の授業実践の取り組みについて示すとともに、授業実践の成果について明らかに、その成果を踏まえ、高校段階における生活圏学習について、これ

までの「考察力重視」から「構想力重視」へと実践をシフトしていくにあたっての今後の課題が提起された。

●話題提供3 「大学の都市計画教育と地理総合の将来—大学が高校に協力する意味—」（北原啓司）

地理学と都市計画学の協働はどこを目指すべきか、教える側が地域資源を調べておくような地理学的手法に対して、発見的方法としての考現学（今和次郎）についての提起があった。さらに総合的な学習の時間で実施されている、総意工夫を活かした横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習は地理総合においても重要である、という指摘がなされた。

●話題提供4 「都市計画学会としての取り組むべき方向性」（菊池雅彦）

都市計画学会として「生活圏の調査と地域の展望」に関する学習について、支援 Web サイトと現場での支援をすべく、2020年度から組織を立ち上げ、コンテンツ作成・支援体制づくりを検討している旨を報告した。具体的には、生活圏の地域調査の事例の紹介、高校の実習の授業実施の支援、まちづくりの教材素材、体験機会の提供、高校生の調査成果の発表の場の提供、進路に関する情報の提供（大学・学科の紹介、まちづくりの仕事の紹介等）等の取り組みの方向性が示された。

●パネルディスカッションにおける登壇者及びフロアの意見の概要は以下のとおりである。

- ・新しい科目が始まることについて、教員や教材に対する危機感があり、学会の取り組みに対して期待をしている。
- ・高校生の発表の場ができることはとても意義がある。
- ・地理総合においては、地域を分析し、課題を発見し、解決に向けて判断するという調査プロセスやスキルが重要である。
- ・教員を対象に、調査プロセスの方法、地域の分析方法、課題を読み解く見方・考え方を伝え、授業設計や行政との連携等の支援をすることが重要である。
- ・教科書は全国版であり、地域のあり方は、各地域で考えることが重要であり、オリジナルな教材が必要である。
- ・高校の先生方と話し合いながら、教材作成など適切な取り組みを行うことが重要である。
- ・高校や地域との信頼関係にもとづいて地理総合への展開を図るべきである。
- ・事例集が適切に活用されるよう、生徒や先生に適切に情報を提供するように検討をしていく必要がある。
- ・地理学には独自の知見や調査分析手法があり、都市計画と地理学が連携して取り組むことにも意義がある。
- ・地理総合に関わることを、大学側でも計画・発表能力の向上や地理学との連携等の観点で生かしていくことが必要である。
- ・都市計画学会として社会と連携することを重視しており、地理総合についても、高校と何が連携できるか高校の先生方のためになることを考えていきたい。

●なお、パネルディスカッションでの意見交換の詳細は以下のとおりである。

1. 登壇者からの都市計画学会の取り組みへの感想・意見

濱野：

- ・新しい科目が始まることに危機感もある。大学で都市計画や地理を学んで習熟した人が教員になっているかというところではない。教師がどれだけの力を持ってこの新しい科目を教えることができるのか、という危機感がある。
- ・さらに、教材の危機感がある。教科書は全国紙であり、地域のあり方を考えるには、各地域でオリジナルなものが必要になってくる。このノウハウを共有し、作りあげていくことが重要である。
- ・今日の話のような学会の動きがあり、支援が得られるのであればと心強く思った。

大島：

- ・事例集については、高校生に示すとそれを正解として使われる可能性もある。生徒ではなく、高校の先生向けに情報を提供するようにするためには、ホームページに公開するのではなく、ホームページで登録をした先生にメールで送付するほか、教科書会社と連携して出版するという方法もある。
- ・また高校の先生方へ教材などの情報を伝達していくことが重要である。このためのアクセスとしては、教科書会社や補助教材出版社の広報誌を活用する手もある。

泉：

- ・高校生の発表の場は、現在のところ、日本地理学会のポスターセッションでの発表の場が唯一の場であり、社会に関わることがほとんどない。都市計画学会での発表の場を、もし設定していただければ貴重な機会となる。
- ・高校の先生方は忙しくてメールも見ることがない。現在は、一部の熱心な先生のみがやっている状況であり、先生方にどのように情報を周知するのも重要である。
- ・地域教育も都市計画も接点が多数見られる。調査の方法を教えること、具体的には探究的なプロセスに沿って丁寧に地域を分析していくという研究方法に共通点が見られる。地理教育においては、残念なことにプロセスに沿って教えることを、とりわけ高校の教員はやっていないケースが多い。これまでは、内容をそのまま教えることに徹してきた。いわゆる知識の注入になってしまっていた。それをどう変えていくのが大切である。
- ・都市計画学会には、このような授業づくりへの支援、学校と行政や地域住民とのつなぎ役を担っていただけると良いと思う。学会の先生が学校にやって来て出張授業を行うだけでなく、連携して授業のカリキュラムを一緒に創っていくことができたらと思う。

北原：

- ・まず学会として、高校生を対象にするのか、先生を対象にするのかをはっきりさせるべきであるが、ここでは先生を対象に考えるべきではないかと思う。
- ・高校生に地理探究を教えるということもあるが、大学の演習とは異なり、高校では授業として実施する。これをどのような教材で行うか、どのようなネタが使えるか、ということ

を高校の先生と一緒に考えて、高校の先生を手伝うこと、先生を支えるようにすることが重要である。

- ・また、学会のメンバーは、行政のとのつながりも強いことから、行政との連携を図ることもできる。高校、大学とも教える側の連携が重要だと感じている。

2. コーディネータとしてのまとめ

篠沢：

- ・濱野氏は、全国版の教材と地域版の教材があり、各地域のノウハウを生かすことが重要との指摘であった。
- ・大島氏は、事例集が正解として使われてしまう危険性、先生へのアクセスを作ること、確実に先生にアクセスするために教科書会社を使うべきという指摘であった。
- ・泉氏は、コンテストは重要な機会であること、先生が見ているメディアと学生が見ているメディアが違うから、それをうまく使い分ければ先生と高校生へ、それぞれアクセスをすることが可能という指摘であった。
- ・北原氏は、高校の先生方から我々がどのように信頼してもらえるか、が重要であるとの指摘であった。
- ・これまで総務・企画委員会として、どのような支援ができるか検討してきたが、これが完成形ではなく、いただいたご意見を踏まえて、さらに来年、再来年と検討を進めたい。

3. フロアからの意見

- ・実際に教材のサンプルの作成を行ったが、今後、高校の先生方とよく話し合いながら、現場で使えるものを作成できるように取り組むと良いと改めて思った。また、コンテストは高校生にとって、貴重な機会になると感じた。
- ・地理学の方々は都市計画とは別の必ずしも問題発見・解決に限定されない観点のものすごい知見があり、都市計画と地理学との方が連携して取り組むことにも意義がある。
- ・地理学会、農村計画学会の立場で参加した。地理学は地域を対象として考えるが、計画論は地域を主体化して考えるという違いがあり、連携ができると良いと思う。
- ・地方の高校では、地域の魅力の向上という課題に取り組む高校が増えているが、専門の先生がいない中で取り組みを始めている状況になっている。このような地域の魅力ということと地理総合の関係を考えていくべきと感じた。
- ・どのように高校の現場で使えるものを提供できるかは、地理学会でも大きな問題となっている。都市計画学会で具体的な検討をしていることに驚いた。さらに取り組みを進めたい。
- ・大学で社会科の教員を輩出している立場であるが、地理学の先生が地理の教員になるのではなくて、多くの場合は、法学部、経済学部、商学部という学部から地理の教員になる。大学でどう教えるか、高校でどう教えるか、を基本に考えることが重要と感じた。

4. 今後の学会の取り組みについての意見

北原：

- ・大学としてこれに関わる時には、高校のためだけでなく、大学にも生かしていく観点がないといけない。例えば、計画する力、発表する力もそうだし、地理学との連携も生かしていけないといけない。そのような観点を持ってほしい。
- ・高校と仲良くしようとする、全国区ではなく、地域毎に考えていくことが必要になる。地域毎に考える取り組みを進めてほしい。

泉：

- ・教員の立場からすると、資質・調査スキルを向上させるにはコンテンツ以上にコンピテンシーが重要。教師の授業設計能力が重視されており、ぜひ授業設計を支援するように考えてほしい。
- ・非常勤をしている大学の教職課程では、地理を専門にしない法学部や商学部、経済学部の学生を教えているが、課題を解決し判断するスキルが重要であり、調査研究を行うためのプロセスを大学教育で教えないといけないと感じている。大学教育でも活用できるようになることを期待している。
- ・現職の教員の再研修も重要である。GISのマップを作るだけでなく、どう読み解くか、見方・考え方が大事である。学問を通じた見方・考え方、課題を見つけ解決するという研修が必要となっており、これを支援できる体制があるとよい。

濱野：

- ・地理総合は、地理学総合ではなく、地理学より学際的な要素を持っており、高校生にとって将来使う事項をピックアップしている。それを汲み取ってご支援をいただければ、と思う。
- ・科目名に総合とか探究とか使っているが、いずれも答えがないものを試行錯誤していくということに取り組んでいる科目である。正しいものに丸をつけるというのではなく、プロセスを教えることで、このようなことで物事を考えていくのだ、という科目にしている。これまで、地域をこうしようと考えているが、それに対して、子供たちがさらにこうしたらよい、と考えるようなプロセスを教えていただけると、現場の先生に役に立つ。

5. まとめ

篠沢：

- ・今後さらに検討を深めて、来年もぜひこのような会を実施して、今日の議論の結果をお返ししたいと思う。
- ・特に、プロセスをどのように教えるか、事例集の取り扱い、高校の生徒・教員がアクセスするメディアへの提供、については議論していきたい。
- ・また、高校や地域との信頼関係にもとづいて地理総合への展開を図るべき、ということをも理解した。高校や地域にサポートできるものを出していきたい。

久保田会長：

- ・都市計画学会は、これまで学を中心に活動してきたが、今後は社会と連携する必要があると考えている。

- ・地理総合についても、学会として高校と何が連携できるかを考えたい。高校生に都市計画を知ってもらいたいという思いもあるが、高校の先生のためになることを考えなければいけないということを改めて感じた。学会としてしっかり取り組みたい。

以上。